

以上、遺物が集中する出土場所や祭祀が行われた位置を考えることで、当古墳群の墓道復元の手掛かりとなると思われる。今後、埴輪の出土位置と併せて検討していく必要があるだろう。

### 3・馬形埴輪について

63号墳出土の馬形埴輪について、若干検討を加えてみることにする。この馬形埴輪は、周溝から細かく割れた状態で出土した。この古墳は、東側に造り出しを持つと考えられるため、出土した位置はその北側に当たる。復元すると、全長約110cm、総高約80cmの大きさとなり、鏡板・鞍・鈴・杏葉などを備える飾り馬で、どの馬具も非常に写実的な表現である。

まず、この馬形埴輪の時期について、脚部の表現から見てみる。脚部は、細い円筒形で下部にいくにつれてすぼまり、段を伴って蹄が表現されている。ここで脚部での表現に着目した、若松良一氏の時期編年<sup>⑧</sup>を参考にしてみる。氏は、脚部の形態を4つ（A類～D類）に分類されている。初期（5世紀中頃）の脚部は、蹄・脛など非常に写実的に模倣している（A類）が、時期が下るにつれて蹄を段で明瞭に表現（B類）するようになる。さらに、太い円筒状で蹄の表現がなくなり（C類）、脚部後側に三角形の切れ込みを入れる（D類）ようになる（6世紀後半）。この分類によると、本例は「B類」に相当し、時期については5世紀中葉の後半とされている。蹄の表現にやや明瞭さが欠けるため、時期は若干下る可能性がある。

次に、馬具の組み合わせ関係から見てみる。馬具そのものについての編年をそのまま利用できるとは限らないが、写実的であることから考えて埴輪工人は実物を見て作成したことは十分に考えられる。

馬具の編年については、これまで多くの人々によってなされている。中でも、小野山節氏による研究<sup>⑨</sup>は、馬具各部位の形態や装着の違いが時期差を示していることを明らかにし、今日の編年の基本ともなっている。その後、さらに氏は剣菱形杏葉に伴うF字形鏡板、雲珠の組合せと編年についても明らかにしている。それによると、剣菱形杏葉を伴う馬具は、5世紀後半から6世紀中頃までであるという<sup>⑩</sup>。

この馬形埴輪は、F字形鏡板と剣菱形杏葉の組み合わせ関係と、前述の脚部の表現から考えて、5世紀後半代と考えるのが妥当であろう。

最後に、頭部から頸部にかけての部分について述べることにする。この部分の上部は大きく外に、下部は緩やかに弧を描き、外面には荒い線刻を縦方向に施す。また、断面形は山形を呈し、馬面からは段をつくる。この部分であるが、一体何を表現したものであろうか。

通常、馬形埴輪のこの部分はたてがみを表現し、上方に刈り揃えられ、その先端を結び飾られる場合が多く、断面形は線状あるいは、T字状を呈する。しかし、この馬形埴輪については、断面形が山形を呈する。ここで考えられるのは、上方へ刈り揃えることなく、下方へ長く伸ばしたたてがみの表現か、この部分に何か別の物を被せたものの表現かであろう。いずれにしても、管見に触れた限り日本に類例がなく、特異な表現であることに変わりはない。

時代や地域を越えるが、中国唐や元の時代の俑<sup>⑪</sup>に、たてがみをなびかせる表現のものがある。縦の線刻が髪表現と理解すれば妥当であろう。しかし、どのたてがみも後ろの背中側になびかせることで表現するものである。しかし、この馬形埴輪は、前の馬面側になびかせてある。ただし、後ろへなびかせることで手綱が宙に浮くのを防ぐために、前の馬面へ持っていたと考えれば不自然ではなくなる。

なお、長く伸ばしたたてがみの表現と考えた場合でも、下部が緩やかに弧を描くことから、刈り揃えているようにも見える。馬のたてがみに何らかの手を加えることの意味も、今後考えていく必要があるだろう。

次に何かの被りものとするならば、馬冑の表現とも考えらる。馬冑に実例としては、日本では和歌山県の大谷古墳<sup>⑫</sup>・埼玉県の將軍塚古墳<sup>⑬</sup>・滋賀県の甲山古墳の3例がある。このいずれも、馬面全面に覆い被せる形である。しかし、この馬形埴輪については、全面覆い被せる表現ではない。この部分の表面は馬面から段をつくり、頭部の後ろ部分に笠状のものを被せた様にも見受けられる。

また、この馬形埴輪は馬具・鞍など非常に写実的に表現され、この部分も同様に表現されているはず

である。鉄などの硬いものであれば、鋳などの表現があっても不思議ではない。縦方向の荒い線刻から考えて、植物質・繊維質などの被りものの可能性もある。たてがみか被りものか、いずれにせよ類例の増加を待って検討を加えたい。

今回の報告では多くのことを割愛している。例えば、出土遺物（須恵器・土師器・円筒埴輪）による古墳の詳細な時期の検討、特異は器種である筒形器台・子持甕の検討、馬形埴輪以外の形象埴輪の検討、旧陸軍第1気象連隊の建物復元などである。これらを含む多くの検討とともに、過去行われてきた平成5～8年度の調査成果の総括を今後行っていきたい。

- (註)
- ① 鈴木敏雄『鈴鹿郡石薬師村古墳誌』・『三重県鈴鹿郡石薬師村考古誌考補記』1911
  - ② 鈴鹿市教育委員会調査の、市道部分・民間宅地部分において、56・57・58・59・60・64・76号墳の7基を含める。
  - ③ 『石薬師東古墳群・石薬師東遺跡（第4次）発掘調査概報』三重県埋蔵文化財センター1996・3
  - ④ 楠元哲夫「六文銭—古墳における須恵器祭式成立の意義とその背景—」『考古学と生活文化』同志社大学考古学シリーズⅤ 1992  
「六文銭」の具体的（定式化した）な例として、杯蓋あるいは身を二列に並列し、各3組、連銭状（かの真田の旗標）に配置するとなる。
  - ⑤ ④と同じ
  - ⑥ 亀田博「後期古墳に埋納された土器」『考古学研究』第23巻第4号 1977
  - ⑦ 伊達宗泰「古墳墳丘上祭祀の問題—新沢千塚古墳群の事例を中心として—」『権原考古学研究所論集』第6冊 1984
  - ⑧ 若松良一「人物・動物埴輪」『古墳時代の研究』9 古墳Ⅲ 埴輪 雄山閣1992
  - ⑨ 小野山節「馬具と乗馬の風習」『世界考古学体系3・日本Ⅲ』平凡社1959
  - ⑩ 小野山節「古墳時代の馬具」『日本馬具大鑑 第1巻古代上』日本中央競馬会1990
  - ⑪ 『馬のシルクロード展—日本の馬文化その源流をたずねて— 根岸競馬記念公苑馬の博物館1985
  - ⑫ 樋口隆康ほか『増補大谷古墳』同朋舎出版1985
  - ⑬ 「埼玉県将軍塚古墳出土の馬具」『調査研究報告』第4号 埼玉県立さきたま資料館1991

番号	遺 跡 名	所 在 地	遺 構	時 期	規 模	備 考
1	茶白山4号墳	四日市市大字泊山字盆井		5世紀後半		
2	丸山1号墳	鈴鹿市河田町	前方後円墳		41.5m	
3	木ノ下古墳	亀山市木ノ下字宮前	帆立貝	5世紀末～6世紀中葉	30.5m	馬形2・家形・人物（男）・淡輪
4	城山古墳	亀山市河合町	前方後円墳		40m	人
5	寺谷3号墳	鈴鹿市郡山町字西谷山663-222	方墳	5世紀末～6世紀初	12m	周溝内祭祀
6	寺谷6号墳	鈴鹿市郡山町字西谷山663-222	円墳	5世紀後半	17.5m	周溝内祭祀
7	寺谷17号墳	鈴鹿市郡山町字西谷山663-222	方墳	5世紀末～6世紀初	10.3m	周溝内祭祀
8	稲葉3号墳	津市野田字稲葉	円墳	5世紀末or6世紀初	18m	男女不明あり 木棺直葬
9	稲葉5号墳	津市野田字稲葉	円墳	5世紀末or6世紀初	15m	男女不明あり・鶏 木棺直葬
10	丸岡C2号墳	安芸郡安濃町妙法寺字丸岡		5世紀末～6世紀初		石室か？
11	中ノ庄遺跡	一志郡三雲町中ノ庄	溝	5世紀末		家・男女不明2・女3
12	清水谷5号墳	嬉野町天花寺清水谷				
13	上出遺跡	松阪市駅部田町花岡	方墳	5世紀末～6世紀初頭	12m	家・男女不明2
14	八重田7号墳	松阪市八重田町向山	円墳	5世紀後半	14.4m 14.8m	馬2・楯・男女不明2
15	常光坊谷4号墳	松阪市岡本町	円墳		17.5m	馬2・淡輪・木棺直葬
16	東山5号墳	松阪市立野町東山	円墳		16m	
17	花岡所在古墳	松阪市小黒田町（飯南郡花岡町大字花岡）	円墳			人物（巫女）頭・腕
18	口南戸古墳	松阪市立野町口南戸	円墳	5世紀末	20m	家・人物
19	狼谷古墳	松阪市岡本町字狼谷	円墳	5世紀末	18.5m	人物・鳥
20	神前山1号墳	多気郡明和町上村	帆立貝	5世紀後葉	38m	家1・蓋3
21	辻ノ原15号墳	度会郡玉城町上田辺字辻ノ原	不明	5世紀末～6世紀初頭	不明	人物
22	キラ土古墳	上野市佐那具キラ土	前方後円墳	6世紀前葉	50m	鶏1

- 1・春日井恒「茶白山古墳群」—電力供給用地中送電線新設に伴う茶白山4号墳発掘調査報告書—四日市遺跡調査会 1996
- 2・鈴木敏雄『鈴鹿郡石薬師村古墳誌』1911  
鈴鹿市教育委員会『鈴鹿市遺跡地図』1987
- 3・三重大学歴史研究会原始古代史部会「亀山市木ノ下古墳の発掘調査概要」『考古学雑誌』第67巻第3号1982
- 4・三重県教育委員会『三重県埋蔵文化財年報』4 1974
- 5・6・7 三重県埋蔵文化財センター『三重県埋蔵文化財センター年報4』1993  
鈴鹿市教育委員会『第4回鈴鹿市埋蔵文化財展—最近の調査—』1994
- 8・9 三重県教育委員会『三重県埋蔵文化財年報』15 1985  
『第16回津の町のうつかり展—古墳時代の津—』津市教育委員会 1988  
竹内英昭「伊勢地方の埴輪事情」『天花寺山』—志郡・嬉野町遺跡調査会 1991
- 10・『中南海開発地域遺跡地図』三重県文化財連盟 1971  
鈴木敏則「伊勢の埴輪系円筒埴輪」『Mie history』vol. 3 1991  
浅生悦生・田中秀和「第1編 考古編」『安濃町史』資料編 安濃町 1994  
三重大学歴史研究会原始古代史部会「長谷山群集墳分布調査報告」『ふびと』40 1983
- 11・谷本鋭次「中ノ庄遺跡発掘調査報告」1972
- 12・図説 津・久居の歴史 上巻〈旧石器時代→江戸時代〉（郷土出版社）1994  
三重県教育委員会『三重県埋蔵文化財年報』18 1988
- 13・下村登良男ほか『松阪市史』第2巻史料編考古 1978
- 14・下村登良男ほか『松阪市史』第2巻史料編考古 1978  
下村登良男「八重田古墳群発掘調査報告書」1981
- 15・松阪市教育委員会「常光坊谷古墳」『中部平成台団地埋蔵文化財発掘調査報告書』1990・3
- 16・下村登良男ほか『松阪市史』第2巻史料編考古 1978  
中村憲一「松尾の遺跡」『松阪史跡探訪』1975
- 17・鈴木敏雄「三重の遺跡と遺物」第1集 楽山文庫 1949
- 18・松阪市教育委員会『口南戸古墳発掘調査報告書』1991
- 19・松阪市教育委員会「狼谷古墳」『中部平成台団地埋蔵文化財発掘調査報告書』1990
- 20・下村登良男「神前山1号墳発掘調査報告書」1973  
三重大学歴史研究会原始古代史部会「多気郡神前山古墳について」『ふびと』25 1966
- 21・前川嘉宏ほか『三重県玉城町史』上巻 1985
- 22・早瀬保太郎「伊賀史概説」上巻 1973  
上野市教育委員会『上野市遺跡地図』1971

第7表 県内の馬形埴輪出土遺跡一覧表